

飛鳥池遺跡出土金属製遺物における 古代金工技法の研究

埋蔵文化財センター

飛鳥藤原宮跡発掘調査部の発掘調査により、大規模な古代の工房跡であることが確認された飛鳥池遺跡からは、ガラスや金工品の製作に伴う遺物が多量に出土している。このたび、この中の金属製遺物2点に特に注目し、詳しい調査を行った。

1 銀—銅合金製棒 (写真1)

長さ約10cm、幅約2.4mm、厚さ0.7mmで、全体の形は不定形であるが、表面はきれいに整形されている。この遺跡からは、金工品の製作過程で出る、切り屑状のものがいくつか出土しているが、この金属棒は、ただの切り屑とは違い何らかの目的をもって整形されているとみられる。不均一ではあるが、平均銀約60%、銅約40%の組成をとり、銀織の可能性があることが、肥塚らにより報告されている¹⁾が、今回の再調査においても、これを積極的に支持する結果が得られた。すなわち、この金属棒は、6～7世紀にかけて、銅製の金工品を部分的に接合するのに用いられた銀—銅二元系合金の銀織に関わる遺物と位置付けることができる。金属の接合技術の歴史の変遷を考える上で極めて重要な遺物である。

2 魚々子鑿の痕跡のある小銅板 (写真2)

表面に鑿で文様を刻んで装飾を加える技法は、金工における表面加飾の基本の一つである。先端を丸く彫り込み小さな輪にした鑿で、金属表面を丸く凹ませ、連続的に平面を埋めていく様子が、魚の卵を蒔いたように見えることから名付けられた魚々子は、わが国では奈良時代以降ではよく使われる。今回調査した飛鳥池遺跡出土の小銅板は、魚々子鑿の痕跡を確認できるわが国では最も古い事例の一つである²⁾。材質は、ほぼ純銅で、電子顕微鏡による観察(写真3)から、魚々子一つの大きさは直径が約0.7mmで、表面の窪み具合から、鑿の刃は、鋭利に立っているというより、浅く窪ませた程度と考えられる。魚々子を施したこの銅板は、精度の高い発掘調査の成果であるとともに、古代金工における表面加飾の技術水準を考える上でも、たいへん重要な遺物である³⁾。(沢田正昭・村上 隆)

1) 肥塚隆保・川越俊一・西口寿生「飛鳥池遺跡出土遺物の材質」(『奈良国立文化財研究所年報』1992) 1993

2) 奈良国立文化財研究所「飛鳥池遺跡の調査(飛鳥寺1991-1次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』23) 1993

3) 村上 隆「ミクロな眼でみる古代金工の世界」(『佛教芸術』213号) 1994